

## 秩父夜まつり

関東山地に囲まれた狭い盆地の埼玉県・秩父市。初冬の淡い夕陽が奥秩父連山の稜線に傾いて武甲の山ひだをひときわ美しく茜色に染めるころ、無数の軒提灯やぼんぼりをともした笠鉢と屋台が夜空にくっきり浮びあがる。12月3日、この日6台の笠鉢と屋台が夜を徹して市内を練り歩いた。20万を越す見物人はその美しさに見とれ、屋台ばやしの太鼓の響に胸をゆさぶられた。

祭りの醍醐味はだんご坂の急坂を曳きあげる時、曳く人もはやす人も手に手に提灯を持ち人波のうずまく中をギシギシと軒をきしませながら笠鉢や屋台を一台一台曳きあげてゆく。乱調子の屋台ばやしの連打が交錯し、祭は最高調に達する。折から仕掛け花火が夜空に色とりをそえる。

山国秩父を象徴する祭礼情緒の『秩父の夜祭』は300年の伝統を受け継ぎ近代化の波に耐えて今も生き続けている。

### 公害報告

## 怨歌

さて今日の社会にて 悲惨の数は多けれど  
渡良瀬川の岸にすむ 民にまされるものぞなし  
鉱毒被害は人のわざ 人と人にて止むものを

栃木県青年合唱団が歌うこの歌は、足尾鉱毒被害に苦しむ渡良瀬川沿岸の農民が、明治33年請願書を持って上京するさい、士気をふるいたたせるため歌った。今その怨念の歌はよみがえる。

公害の原点「足尾」。そこは明治時代の富国強兵政策をささえ、文明開化の一翼をになってきた。昭和の今、工場を開む四方の山々は枯れはて、むきだしの山はだは生けるものの存在を拒む。かつて木々がおい繁りそこに生きながらえていた人々のこんせきすらとどめていない。むきだしの山から流れる土砂は日本一の三川ダムを埋めつくし、度重なる洪水は鉱毒を下流へ押し流した。渡良瀬川は百年を経た今日も鉱毒を含んで流れ続ける。

昔その流域には豊かな半農半漁の村々がひろがっていた。しかし、流れくる鉱毒に土地は汚され、鉱毒による死者は明治31年には1,000人を超えるにいたった。

栃木県佐野市に住む教師、前沢敏さんの調査によると、乳幼児の死亡率は90%にものぼることが判明した。農民はたちあがった。栃木県選出の国会議員田中正造は天皇に直訴するにおよんだ。しかし官憲の圧力の前に農民の抵抗は敗れ去った。渡良瀬川流域の谷中村の人々は土地を追われた。今谷中村を見おろす土手のそばに、肩をよせあうに生き続けている。百年の怨念をうちに秘めて。谷中村はすぐではなく、そのこんせきを示す墓石は草葉の陰におおいかくされようとしている。

栃木県小山市に住む画家小口一郎さんは描き続ける。流れの中に埋没しようとする谷中の惨状を、この事實を忘れさせてはなるまいと。

足尾の鉱毒は、今も人々を苦しめ続ける。群馬県太田市毛里田の農民は古河鉱業足尾鉱業所を相手に132億円の補償を要求親子3代の恨みをこめて立上った。

鉱毒が渡良瀬川のほとりを流れて百年、足尾をとりまく公害の現実はどれだけかわったか。「怨歌」、それは今も生きている。